



ロジン技術者 藤田定行さん

松とともに生き、松の恵みを受け、松の再生に挑む

古来、松には神仏が宿るとされてきた。神社仏閣に必ずと言っていいほど松の木が植えられているのはそのためだ。その松から採れる松やには、神社仏閣に奉納される伝統工芸品などに多様な用途で使われている。だが、国産の松から生松やなまにを採集して精製する技術は、すでに50年以上前に途絶えたままだ。今、その技術の復活に挑もうと立ち上がった技術者たちがいる。

国産松やにを自前でつくれ

それは1本の電話から始まった。2015年夏、日本有数の神社からハリマ化成の広報室に「国産の松やにが欲しいのですが」と、問い合わせてきたのだった。この神社は、神に奉納するための和弓の製作を専門業者に依頼したところ、国産松やにが手に入らないと吐露されていた。弓弦には化学繊維も使われるが、もともとは麻糸を何本も撚り合わせてつくられていた。そして弦を補強する

ために薬煉くすねを塗るのが古来の技法であった。薬煉とは、松やにを油で煮て練ったものだ。

「神に奉納するものなら、原材料は国産のものでなければならないのが慣例。日本の伝統を継承するためには、原材料から見直さなければならぬ。松から採れる松やに（ロジン）を原料に多様な化成品を製造しているハリマ化成なら、国産の松やにもつくっているだろう」

神社はそう考えたのだった。

しかしその問い合わせに、ハリマ

化成はこう答えるしかなかった。

「当社にも国産の松やにはありませんし、国内で流通しているという情報もございません」

太平洋戦争の頃、諸外国は石油と同じように松やにも輸出規制品の対象にした。そのため日本は国産松やにの増産に力を入れ、戦後の1950年頃には年間6,000トン近くの国産松やにが生産されていた。1947年創業のハリマ化成も、その頃は国産松やにを原材料として使っていた。だが、その後、次第に安価な中国産が台頭



ふじた さだゆき 1949年、兵庫県出身。姫路工業大学卒業。1972年、ハリマ化成入社。40年以上にわたり、松やに（ロジン）に関わる仕事に従事してきた。ブラジルにハリマ化成が建設した生松やにの蒸留工場の責任者を務めたこともある。現在は同社顧問。

※1=トールロジン 松材から製紙用クラフトパルプをつくるときに、副生する粗トール油を蒸留してつくる
※2=ガムロジン 松の立木から集めた生松やにを蒸留して得る

し、国産松やには年々生産量が低下していった。そして1960年代の半ばには、ついには国産の松やにが工業製品の原材料として使われることはなくなってしまったのだ。以来、すでに50年以上の歳月が経過している。

だが、神社からの相談の話を聞いたハリマ化成グループの長谷川吉弘社長は、即座に指示を出した。

「日本の伝統技術の継承がわが社にかかっている。これこそ我々の存在の原点である。何とか国産の松やにを自前でつくろう。ただし、工業ベースでの生産は難しいから、技術の伝承と文化財の保護を目的に、継続して供給する方法を考えよう」と。

この指示を受けて国産松やにの復活に動いたのは、ハリマ化成を定年退職後、現在顧問を務める藤田定行であった。

松にストレスを与えない採集を

藤田がハリマ化成に入社したのは

1972年のことであった（当時の社名は播磨化成工業）。当時は石油化学の全盛時代で、姫路工業大学で応用化学を専攻した藤田も、石油化学系の企業に就職することを考えないわけではなかった。だが、大学の指導教授から「加古川に松やにで化成品をつくる有望な会社がある」と勧められた藤田は、「人とは違ったことをしたい」という思いもあり、ハリマ化成に入る道を選択したのだった。

最初に配属されたのは、米国産の粗製トール油から高品位のトールロジン^{*1}を分離するプラントであった。以来、藤田は40年以上にわたり、松やにに関わる仕事に従事し続けてきた。その間にはブラジルのガムロジン^{*2}蒸留工場に赴任したこともあったし、中国広西チワン族自治区を訪れ、手作業で松やにを採集している現場を視察したこともあった。

その藤田は長谷川社長の指示を受けたとき、こう考えた。

「せっかく、国産の松やにをつくる

のであれば、自然環境にやさしく、松になるべくストレスを与えない方法で最高品質のものをつくりたい」

そして、①分泌促進剤は使用しない ②金属製の釘や槌は使用しない ③松やにを採集するために松につける溝は必要最小限に ④淡色の生松やにを採集する、という目標を立てた。

こうした目標の下、藤田はまず50年以上前にどのような方法で国産松やにが採集されていたか調べてみた。だが、採集方法や精製方法などを知るために必要な文献は散逸して、ほとんど見つからなかった。ただ、藤田はハリマ化成の創業者である長谷川末吉から、かつての手法を直接聞いたことがあった。そのときの記憶を頼りに藤田は手探りで国産松やにの生産に挑んだのである。

低温水蒸気蒸留法を復活させる

そのためにまず必要なのは、松林



①粗皮むきを使い、表面から厚さ10mmほどの粗皮を剥ぐ。うろこ剥がしとも言う。
②溝切り。滲み出てくる松やにを見て藤田さんは「この色に魅せられた。まるで汗の滴のようでしょ」と言う。

だ。ハリマ化成の加古川製造所（兵庫県加古川市）にも400本以上の松が植えられており利用できるが、継続的に松やにを生産するのであればそれでは不十分だ。幸い、格好の適地が見つかった。岡山県美作市にあるゴルフ場の作州武蔵カントリー倶楽部である。約50万坪の広大な敷地に全27ホール3コースを配したこのゴルフ場には、天然の赤松林がふんだんにある。コースに立ったとき眼前に広がる光景がどこか日本的な印象を与えるのも、松の木が多いからだ。しかも何より好都合だったのは、このゴルフコースを経営するのがハリマ化成だということであった。藤田たちは同倶楽部の全面的な協力の下、2015年の春、ゴルフ場に生える10本の赤松から、約300グラムの松やにを採集した。

まず表面の粗皮を剥ぎ、樹脂道に沿って鑿のみで溝を掘る。すると見る見るうちに透明な松やにが出てくる。無色透明な天然生松やには、神々し

ささえ感じさせる美しさがある。溝の先に竹製の樋とプラスチックの容器を固定して取り付けておけば、自然とそこに松やにが溜まる仕組みだ。通常は松やにの出をよくするために分泌剤を使用するが、それは松に必要以上のダメージを与えるし、今回は工業用ではないので大量に採集する必要はないから分泌剤は使用しなかった。

ブラジルや中国で松やに採集に携わったスタッフから話も聞いていたので、ここまではさほどの困難はなかった。問題は精製方法だった。藤田は古くからある低温水蒸気蒸留法にこだわった。今はほとんど用いられないこの方法を復活させて伝承することも重要と考えたからである。ただ、この方法だと、高純度の松やにをつくるのが難しかった。そこで藤田は「昔の蒸留法では、この程度

の純度の松やににしかできなかったのではないかと考え、それほど純度の高くない松やにを神社に奉納した。すると弓弦を製作した専門業者からは「これで十分です」という答えが返ってきたのだった。

私たちは 松の恵みで生きてきた

こうして国産松やにを使用してつくられた神宝「梓御弓あずきのおんゆみ」は一昨年夏、無事、神社に奉納されたのである。

一方で長谷川社長は、出雲大社を訪れていた。そしてそのとき偶然にも通りに立ち並ぶ松の大木のほとんどの、大人の腰あたりの高さから下にかけて、松やにを採集した痕跡があるのに気がついた。おそらく第2次世界大戦中につけられた傷跡であろうと推測された。これを見て長谷川社長は、松の傷跡の修復法について調査するよう社内に指示を飛ばした。そこで広報室が、取材を予定し



③ ④

③「松に対して竹の髄は相性がいい」と、鑿を打ちながら、どことなく楽しそう。④「人も傷を負ったら薬を塗って包帯を巻く。松も同じ」松をいたわりながら、ゆっくりと荒縄を巻いていた。

ていた松や藤の古木の移植で知られる樹木医の塚本こなみさん^{※3}に相談したところ、松やにの採集直後に松を保護することが重要で、ハリマ化成にぜひ取り組んで欲しいと提案を受けたのである。

それを聞いて藤田は早速、松やにを採集するために幹に傷をつけた松の修復に取り組むことにした。だが、藤田の知る限り、そのような試みが行われたことは世界でも皆無である。しかし、名勝に残る数々の採集痕を見れば心が痛むのも確かだ。日本人ならなおさら松への愛着がある。これも我々の使命だと確信できた。そして、塚本さんから、松が生えているところの土と、松の木を燃やしてできた灰を混ぜ、適量の水を加えて粘土状にして、傷をつけた部分に塗布し、その上を荒縄で巻くという方法を試してみるように勧められたのだった。

11月24日、時折雨が降る中、作州武蔵カントリー倶楽部で、おそらく

世界で初めてであろうその試みが行われた。藤田は手が汚れるのもいとわず、自ら土と灰をこね、傷口をいたわるように前年に採集を終えた松の幹に塗布した。荒縄を巻いた後は、さらに縄と縄の間のわずかな隙間にもそれを塗り込んだ。心の中で「ありがとう」とつぶやきながら。「私たちは松の恵みで生きてきた。それに対する感謝の気持ちが、こういう取り組みになったのです」

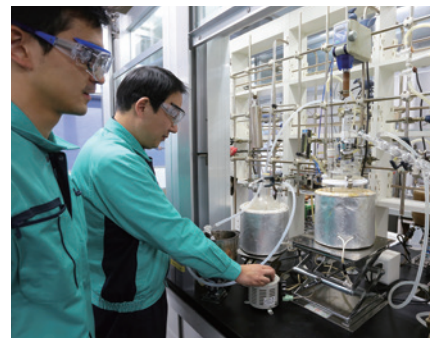
ハリマ化成には、国産の松やにを求める声が、伝統工芸に携わる人などから寄せられている。そうした声に応えて「年間数トンくらい、国産松やにをつくるのが夢」だと藤田は言う。

修復が果たして成功するのか、結果はまだ分からない。とりあえず1年間は荒縄を解かずの様子を見守ろうと藤田は考えている。その間には、

土と灰の配合を変えたり、荒縄ではなく菰で覆うなど、いくつか他の方法も試みてみるつもりだ。

塚本さんは「2年後になるか、3年後か、あるいはもっと先になるかもしれない。それでも松の再生を促すには十分な可能性があります」と言っている。

いつかきっと松の傷跡をきれいに修復できる日が来る。藤田もそう信じている。そのときその松の木は、私たちに新しい希望を指し示すに違いない。あの、奇跡の1本松のように。



加古川にあるハリマ化成の実験室で、低温水蒸気蒸留法によって約300グラムの生松やにから200グラムほどの松やにを精製することに成功。

※3=HQ 129号「伝説のテクノロジー」に登場